

大阪府

研究協力校（課程又は障害種）

- ・大阪府立生野支援学校（知的）
- ・大阪府立東淀川支援学校（知的）

研究の成果

観点Ⅰ：

各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

Ⅰ. キャリア教育マトリックスの作成・活用

大阪府では、研究協力校である 2 校ともに、キャリア教育の観点から教育課程の改善及び充実を研究テーマとして設定した。

大阪府立生野支援学校（以下、「生野」）では、キャリア発達の定義や育ってほしい力をまとめたものとして、キャリア教育マトリックス表を作成した。育ってほしい力を 4 つの領域（①人間関係形成・社会形成能力②情報活用能力③将来設計能力④意思決定能力）に分け、小学部の児童をイメージしながら第一段階、中学部の生徒をイメージしながら第二段階、高等部の生徒をイメージしながら第三段階というように学部毎のキャリア発達の目標を設定した。

しかし、中学部や高等部の生徒の中にも小学部の目標を取り入れる生徒がいるため、あえて小学部、中学部、高等部という表記ではなく、あくまで児童生徒の発達段階に応じた目標を取り入れられるよう第一段階、第二段階、第三段階という表記にすることとした。

このように作成したキャリア教育の目標を、小学部から高等部までの授業や特別活動、学校行事等あらゆる場面に取り入れ、シラバスにもキャリア教育の観点欄を追加することでキャリア教育を意識しながら教育活動を行っている。

また、大阪府立東淀川支援学校（以下、「東淀川」）でも、キャリア教育マトリックス（資料 1）を作成している。「東淀川」では、小学部は職業及び生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期、中学部は職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期、高等部は職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期と位置づけている。

「キャリア教育マトリックス（育てる力）」でキャリア発達の段階を「人間関係の形成、コミュニケーション」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の 4 領域からとらえ、学部ごとに段階的に育てたい力を設定し、それらを象徴する言葉として小学部「気づく」

中学部「伸ばす」高等部「活かす」を各学部のテーマとしている。

大阪府立東淀川支援学校 キャリア教育マトリックス(育てる力)			
キャリア発達段階	小学部	中学部	高等部
	職業及び生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期	職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
	小学部段階で育てたい力【気づく】	中学部段階で育てたい力【伸ばす】	高等部段階で育てたい力【活かす】
コミュニケーションの形成	人とのかわり	自己理解・他者理解	自己理解・他者理解
	自分や友だちの良い所に気づく	自分と相手の違いを理解する 「わかった」「できた」体験のなかで肯定的な自己理解をする	社会生活における自己理解する・他者の考え方や個性の尊重をする
	集団参加	協力・共創	
	友だちに関心をもち仲良く関わる	役割を理解し協力をする経験を重ねる ・異年齢の集団で活動する	・集団(クラス・グループ・チーム)の一員としての役割を最後までやりとおす
	意見表明	意見表明	
	自分の気持ちや考えを表現する	・集団の中で必要な思いや意見を表現する	・必要な支援を適切に求めたり、相談できる表現力をつける
	あいさつ・挨拶・あいさつ・あいさつ	場に応じた言動	
	あいさつや返事をし、手洗いうがい等の習慣を身につける	・清潔や状況に応じた言葉遣いや振る舞いを理解し、身につける ・清潔や身だしなみに関して理解する	・時間、場所、場合に応じた言動を身につける
	情報への関心	情報収集と活用	
	スケジュールを知り見直しをもって活動する 分からないことを自分から聞く	・活動や行事での行程を理解し、見直しをもって取り組む ・職業体験や実習を通して、業種への関心をもつ ・連絡やさまざまな情報も収集する	・社会生活に必要な専門情報を収集し活用する
情報活用能力	社会資源の活用とマナー		法や制度の活用
	身近なきまりやルールを知る	・身近なきまりやルールを守って行動する ・社会の出来事に関心をもつ	・社会の様々なルールや制度、サービスを理解し実際に利用する
	会談の扱い	会談の扱い方と準備	就業生活の場での準備
	さまざまな体験を通して会談の大切さに気づく	・お話を聴いて貰い物事や人に慣れる ・会談の大切さや準備の方法を理解する	・労働と報酬の関係を理解する・計画的な消費と金銭管理を理解する
	ほかの人の言い分を聞き取る	役割の理解と責任の重み	
	自分や友だちのがんばりを認め合う	係活動やお手伝いの役割を果たし、認められることで役に立つ喜びを感じる ・学校生活、家庭生活において、自分の果たすべき役割を理解する	・職業及び働くことの意義や喜びを知る・社会生活において果たすべき役割を実行する
	生活リズムの習慣	習慣形成	
	身の回りのことを自分でできるようにする 決められた時間や順序を守って行動する	将来の職業生活に向けた基本的な習慣の基礎を身につける	・職業生活に必要な習慣形成を身につける
	【夢の】【希望の】への関心	夢や希望	
	好きなこと・やりたいことを見つけて いろいろな職業に関心をもつ	・将来への夢や憧れの職業をもつ ・好きな活動への意欲を学習活動へつなげる	・働く生活を中心とした新しい生活への希望をもつ、体験をする
将来設計能力	職業への関心	生きがいややりがい	
	さまざまな活動に意欲的に取り組む	・物事をやり遂げようとする気持ちをもつ	・就業の意義の裏面と自身のライフスタイルに基づいた余暇の活動を見つける
	学級や学部の一員として自分の役割を果たす	進路計画	
		・進路決定に向けて、計画を立てる	・自分に合ったライフスタイルに結びつく進路計画を立てる
	目標設定	課題解決や目標達成	
	教師と一緒に目標を決め、その目標を意欲して活動する	・自分で目標を決め、達成に向けて進んで取り組む	・将来設計や進路希望の実現を目指し、目標の設定と課題の克服をする
	自己選択	自己選択(決定)責任	
	自分のやりたいことや好きなものを選ぶ	・自分の個性や興味、関心を理解し、よりよい選択をする ・見学や体験を基に、進路先を主体的に選択する	・企業や校内における実習などの経験に基づき進路選択と決定をする
	振り返り	肯定的な自己評価	
	活動後に振り返り、肯定的に評価する		・企業や校内における実習などにおいて行った活動の自己評価をする
意思決定能力	教師と一緒にがんばったこと、楽しかったことなど、活動の振り返りをする	自己評価・コントロール	
		・課題解決のための方法を考えたり、様々な選択肢があることを知りたりする	・課題解決のための選択肢があることを理解し活用する

資料1 「キャリア教育マトリックス(育てる力)」(「東淀川」)

観点2:

教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2-1. 「生野」の事例

「生野」では、教育課程の編成に関しては、教育課程検討委員会(管理職、教務部長、各学部主事、各学部教務主任)を月に1回開催しており、その場でキャリア教育マトリクスや年間指導計画、個別の指導計画の様式、2学期制等について検討している。また、学部主事、教務主任を中心に各学部でも学習指導要領を基に教育課程の見直しを行った。

個別の指導計画に関しては、学部によって異なる部分もあるが、年度末に次年度の計画を立てて新年度の担当が見直すようにしている学部や、新年度の4月から5月までに児童生徒の実態把握を行い、6月までに計画を立てる学部がある。実態把握はいずれの学部も日々の児童生徒の学校生活での様子を基に学年、クラス、グループ、教科で相談したうえ、目標の設定を行っている。

2-2. 「東淀川」の事例

「東淀川」では、教育課程実施計画表に基づく年間計画に沿って授業を行い、授業研究を中心とする実践研究を通して組織的・計画的に教育活動の質の向上を図り、教育目標の達成をめざしている。

個別の指導計画に関しては、年度当初に保護者と情報を共有して、学期ごとに個別面談等の機会に個別の指導計画に基づく評価を保護者とともに行って短期目標等の修正を行っている。また、年度当初に学級担任間で評価し合いながら個別の指導計画を作成し、学期ごとに目標達成状況を学級担任間で評価し短期目標等の修正を行っている。

観点3：

個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3-1. 医療的ケアが必要な児童生徒への配慮（「生野」）

「生野」は、知的障害支援学校であるが、医療的なケアが必要な児童生徒や身体障害者手帳（肢体、視覚、聴覚）を取得している児童生徒が複数在籍している。看護師も勤務しており医療的ケアが必要な児童生徒に対しては、日頃の体調管理はもちろんのこと、緊急時シミュレーションの際に専門的な立場からアドバイスを受ける等、児童生徒が安全に、安心して学校生活を送れるよう配慮している。

また、視覚障害や聴覚障害がある生徒に対しては外部の講師を招いて単眼鏡や白杖の使い方、難聴児童生徒へのアプローチの仕方等の研修の機会をもつ等、個々の実態に合わせた指導ができるようにしている。他の障害に合わせた大掛かりな設備環境や教具もないため、学校でできる範囲をあらかじめ保護者等に示し相談しながら児童生徒への支援を進めている。

3-2. 主体的・対話的で深い学びを実現するための手立て（「東淀川」）

「東淀川」では、主体的・対話的で深い学びを実現するために、「三つの力」を設定し、学校全体で共有している。第一に「自ら考え行動する力」、第二に「変化に対応できる力」、第三に「コミュニケーション力」である。それぞれの力を育てるため、次のような手だてを共有した。

まず、「自ら考え行動する力」を育てる手だてとして、具体的でわかりやすい指示や、自主的な判断や見通しが持てる工夫、理解度に応じた学習内容の変更・調整をし、基礎的・基本的内容を重視した。

続いて、「変化に対応できる力」を育てる手だてとして、経験をもとに考える機会を多く用意する、考えやすい発問や提示の仕方の工夫、学習したことが実際の生活に役立つよう具体的で体験的な内容の工夫、場面や状況を把握し望ましい行動がとれるよう助言、自分の思いや考えを表現できるよう支援した。

最後に、「コミュニケーション力」を育てる手だてとして、文字の大きさや文の長さ、ルビや話し方等を工夫して提示、伝わりやすい表現方法の獲得や代替手段に関する工夫、対話の履歴が確認できる工夫を行った。

これらの手だてを児童生徒の実態に合わせて講じることで活動そのものや活動を通した学習の深まり・定着を促している。

観点 4 :

障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4. 「東淀川」の事例

地域の小学校2校、中学校2校、高等学校1校と通年で積極的に交流及び共同学習を行っている。例えば小学部では、小学校と音楽の授業で交流したり小学校の児童が本校で障害や支援教育について学ぶ取組を行ったりしている。また中学部では、中学校と部活動の交流を行っている。高等部に関しては、職業デザインコースや作業学習の授業で高等学校の生徒と交流を行っている。これらの取組について、関係学校間で毎月「地域連携会議」を開き、取組を振り返っての評価と次回の計画作成等を行っている。

その他校内で、高等部生徒が小学部児童に絵本の読み聞かせを行ったり、中学部と高等部生徒が合同で部活動を行ったりするなど学部間で交流している。

観点 5 :

多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5-1. 授業改善アドバイザーの助言による授業改善

両校に授業改善アドバイザーを配置し、授業改善を図った。「生野」では、平成29年11月に、元校長を1名、授業改善アドバイザーとして配置し、火曜日～木曜日に授業観察と教員への助言等を行った。特に平成29年度にスタートさせた高等部の職業コースに重点を置き、印刷や清掃の授業を担当する教員の職業教育への意識改革や授業内容・方法についてのアドバイスをを行い、キャリア教育の充実に取り組んだ。

「東淀川」では、授業改善アドバイザーを教育課程にかかわる「ソフト面アドバイザー」として1名、作業効率、安全面、コミュニケーション等、企業が求める力の育成（職業教育）を重視した「ハード面アドバイザー」として1名を配置した。

ソフト面アドバイザーに関しては、特別支援教育・キャリア教育に造詣の深い教育経験者である元府立支援学校校長を週2日配置し、校内で研究授業を10回実施のうえ、指導助言を受けた。また、アドバイザーは全校教育課程検討委員会にも参与し、事業改善に向けたシステムづくりの一つである授業シート及び参観シートの様式作成や運用に向けての助言や実践研究報告会にむけた協議において助言を行った。

ハード面アドバイザーに関しては、企業において製造ラインの構築に長年携わった経験のある技術者を週 1 日配置した。アドバイザーからは主に、高等部の職業コースの授業、作業学習での環境構築について技術的助言を受けた。

このように、2校において、授業改善アドバイザーの指導助言により、教育課程の充実及び授業力向上につなげる取組を行った。

5-2. キャリアパスポートによる振り返り

児童生徒が自身の成長を実感したり、学習を振り返ったりするための工夫として、両校においてキャリアパスポートを作成した。「生野」では、職業コースにおいて、生徒が日誌の形で記入することで、生徒自身の意識の変化等を実感することにつながった。

「東淀川」では、生徒が自身の変容や成長を確かめるためのポートフォリオとして活用した。